

芝川家と教育、広岡浅子と竹鶴政孝・リタ

芝川能一

ご紹介にあずかりました芝川でございます。突然ですが、今回のご案内チラシに掲載された私の顔写真の背後に、黄色い物体が写っております。これは当社で所有しておりますアート作品のラバー・ダックなのですが、本日会場に來られた方で、ご覧になったことがある方はどの程度いらつしやいますでしょうか。結構いらつしやるんですね。では、実はこのアヒルちゃんのお父さんというのを、ご存知の方はいらつしやいますでしょうか。これはわずか、少ないです。私がオランダの作家に依頼して制作してもらったことで、ラバー・ダックファンの方々から「アヒルちゃんのお父さん」と呼ばれているのですが、このことはあまり知られておりません。このお話は今日の本題とは関係ございませんけれども、写真の関係でご紹介させていただきます。ラバー・ダックについてはこれまで何回もお話しさせていただいておりまして、極めて手慣れたといいますが、口慣れた話なんですけれども、今回は本邦初公開の資料もご紹介しながら新たな切り口でお話しさせていただきますので、

どの程度うまくお話しできるか分かりませんが、約六十分ほどお時間頂戴しておりますので、よろしくお付き合いください。

まず冒頭に、私どもの会社の説明をざっとさせていただきます。特徴的なのは、株式会社としての設立が非常に古いということで、既に百年を超えております。それから資本金が少ない。そしてもともとは「千島土地」という社名の通り、土地と建物の賃貸が主な事業だったのですが、最近は航空機のリース事業でありますとか、先ほどのラバー・ダックに代表されます地域創生・社会貢献事業というようなことにも取り組んでおります。

そして本日は、当社の創業家である芝川家の三人を中心にお話を進めさせていただきます。四代目の芝川又平、五代目の芝川又右衛門、それから芝川又四郎です。この三人を縦軸といたしまして、大阪住吉との関わり、教育との関わり、そしてNHKの朝ドラの登場人物との関係について、お話をしたいと思います。

まず芝川又平です。芝川又平と五代友厚の関わりについて申し上げます。昨年の秋の朝ドラから、今も五代ブームが続いておりますけれども、広岡浅子と五代友厚は、実際はドラマのような親しい間柄だったということを証明する史料は発見されていないそうです。広岡浅子というのは恰幅のいい女性で、洋装で中之島界隈を闊歩していたということですので、恐らく二人に接点があったのではないかと思うんですけれども、やりとりした書簡なども残されていないようで、朝ドラの「あさ」と「五代さま」の関係はあくまでもフィクションであるということがあります。一方、芝川又平と五代友厚については色々と史料が残されておりますので、それらをご紹介しますながら話を進めて参ります。



芝川又四郎



芝川又右衛門



芝川又平

まず堂島米商会所についてです。江戸時代、大阪の堂島米会所では、世界に先駆けて先物取引が行われていたわけですが、明治二年に、幕末維新の混乱で閉鎖されてしまったんですね。それを改めて、明治九年に全国に先駆けて株式組織として「堂島米商会所」を設立しました。そのときの設立の嘆願書には、発起人の一人として芝川又平の名前が出てきます。発起人は十六人おるんですけども、その中には五代友厚の名前は出てきません。表に名前は出てこないんですけども、黒子として活躍した創立の立役者が五代友厚でした。設立時の資本金明細を見ると、芝川又平は磯野小右衛門や鴻池善右衛門、三井元之助といった方々と並んで大口の出資をしたということがわかります。設立時に又平は、頭取、副頭取に続く肝煎という役職に就任し、その後、明治十二年から約一年弱、米会所の頭取を務めたということです。堂島米会所は、明治二十六年に堂島米穀取引所に改称されましたが、そのときの初代の理事長を務めたのが、広岡浅子のご主人の弟の広岡久右衛門正秋であったということです。

続きまして、大阪商工会議所です。設立当時は大阪商法会議所といっておりましたが、五代友厚が設立を主唱したことで有名ですが、芝川又平も設立者の一人として名を連ねております。また設立後には、五代友厚が初代会頭、芝川又平は理事を務めました。商法会議所は、



大阪商法会議所 約定書

設立当時は五代友厚が経営していた会社内に仮事務所を設置し、会議は場所を変えながら転々と実施しておったんですけれども、明治十二年に最初に拠点を構えたのが「高麗橋四丁目二十二番地」で、現在の淀屋橋の御堂筋沿い、三菱東京UFJ銀行の御堂筋側に「大阪商法会議所跡」の碑が建っております。実はこの用地の取得には芝川又平が大きく関与しております。こちらは当社に残っている資料ですが、商法会議所の土地建物を、芝川又平の名義で購入していることがわかります。土地建物の所有権は商法会議所なんですけれども、代金は余裕があるときに芝川へ入金すること、こと、「催促なしのあるとき払い」で提供したという内容です。その後、明治二十四年に商法会議所が堂島浜通の方に新築移転するまで、こちらの土地建物が使われました。

次は教育の話題になりますけれども、大阪商業講習所、現在の大阪市立大学についてです。こちらも五代友厚が創立員代表として、開設準備を進めた教育機関であります。明治十三年に設立されておりますが、芝川又平は設立には関わっていません。明治十三年のは最初の経営がなかなか苦しくて、明治十八年に府立大阪商業学校になるまで、非常に資金難で苦労されたようで、芝川はちょうどこの苦難の時期に寄付を行っております。創立から明治十九年までの寄附金明細を見ても、芝川の他に、藤田伝三郎や住友吉左衛門、鴻池善右衛門、広岡久右衛門、そしてもちろん五代友厚と、当時の大阪財界のそうそうたるメンバーが関わっていたことがわかります。

さて、こちらは少し時代が遡りまして、明治二年の資料です。「百足屋又右衛門」とありますが、「百足屋」と



通商司為替会社御貸付方拜命の文書



五代友厚への書簡（大阪商工会議所 所蔵）

いうのは芝川家の屋号です。広岡家は「加島屋」と称しましたけれど、当時は屋号を持つておったんですね。「又右衛門」というのはこれまでお話ししてきました芝川又平のことです。又平は隠居後の名前で、隠居前は又右衛門を名乗っておりました。本日は隠居後の話題が中心となりますし、二代目の又右衛門との混同を防ぐために「又平」でお話しさせていただきます。話を元に戻しまして、これは又平が通商司為替会社の御貸付方を

政府から拝命したときの文書なのですが、この通商会社・為替会社の設立に尽力したのは五代友厚でありました。ですから、実はこの頃から、五代友厚と芝川又平には接点があったのかも知れないと思っております。なお、五代友厚が通商会社・為替会社を設立する際に協力を呼びかけた大阪商人のひとり、さきほども登場いたしました広岡浅子の義理の弟の広岡久右衛門正秋で、広岡正秋は設立後に通商司為替会社の総頭取に就任しております。

最後にご紹介するのは、芝川又平が五代友厚への贈り物に添えた書簡であります。これは大阪企業家ミュージアムに保管されておりますが、これ以外にも複数の書簡が残っております。五代友厚は又平よりひと回りほど年下ではあるんですけども、手紙の内容を見ても、又平が非常に敬意を持つて



芝川家住吉別荘

五代友厚に接していた様子を伺い知ることができるようになっています。

続きまして、又平の息子の芝川又右衛門についてお話しさせていただきます。又右衛門はほぼ岡浅子と同じ世代であります。

最初は大阪住吉との関わりについてです。又右衛門は、現在の住吉大社の境内の一部を所有しておりました。そこにはかつて神宮寺というお寺があったんですが、明治政府の神仏分離により廃寺となりました、その跡地を私どもが明治二十二年に購入したのです。当時の様子はこんな感じですね。芝川家の別荘を建て、スポーツ運動場みたいなものもつくって使っておりました。ちょうど明治十八年に阪堺電車が開通しておりますので、芝川家の本邸があった大阪の中心部からも行きやすかったのではないかと思います。

この土地はその後、大正五年に東洋紡専務の岡常夫に売却いたしました。皆さん、大阪の綿業会

館はご存知でしょうか。綿業会館は岡常夫の遺言により、ご遺族が寄付された、当時のお金で百万円をもとに建てられました。謄本によりますと、こちらの土地は岡常夫のご息子が相続された後、昭和十五年に住吉大社に移譲されて現在に至ります。

次は、朝ドラ「あさが来た」に関係するお話です。日本女子大学の設立に対する貢献でございます。ドラマにも出てきましたけども、梅花女学校で教師をしておりました成瀬仁蔵が女子教育の必要性を訴え、それに共感した広岡浅子が政財界に協力を呼び掛けて、明治三十四年に「日本女子大学校」が設立されました。芝川又右衛門は発起人に名を連ねておりますが、日本女子大学の資料によりますと、又右衛門を発起人に勧誘したのは、広岡浅子のご主人であります広岡信五郎だったということです。広岡信五郎は、ドラマでは三味線に精を出す趣味人；悪く言う遊び人のように描かれていましたけども、広岡信五郎が、鴻池や芝川を訪問して勧誘されたということです。当初勧誘を受けた時点では、どうも又右衛門はお断りしたようなのですが、その後、詳しい経緯は定



日本女子大学寄附金収入簿
(日本女子大学 所蔵)

かではございませんけども、実際には発起人に就任し、寄付もしております。又右衛門と広岡家との関係ですが、広岡信五郎、そして弟の久右衛門正秋とは、財界等を通してのつながりがあったものと思われれます。また、芝川又平、又右衛門はともに茶道を好みましたので、茶人としてのつながりもあつたかも知れません。こちらが寄付の証文ですね。日本女子大学で保存されている資料ですけれども、当時のお金で二千円を年四百円ずつ、五分分割で支払っております。日本女子大学は、当初、大阪の天王寺に用地を購入していましたが、実際には、広岡浅子の実家であります



甲東園前停車場



甲東園芝川又右衛門邸

物ができましたのは、明治四十四年でありまして、現在は、名古屋の博物館明治村に移築されております。明治村というと、フランク・ロイド・ライトの設計した東京の帝国ホテルの建物の一部が移築されていることで有名ですが、実はあの建物は大正年間の建物であります。本来「大正村」に行くべきものなのではないでしょうか、あまりにも有名な建物なので、今や明治村のシンボルのようになっております。ところで、明治村に移築されている建物には、著名な建築家によるものがないというのを聞いたことがございます。芝川邸は、武田五一という、後に京都大学建築学科の創設にも関わった建築家により建てられた個人住宅ですので、明治村の中でも、ひととき異彩を放っておるようです。

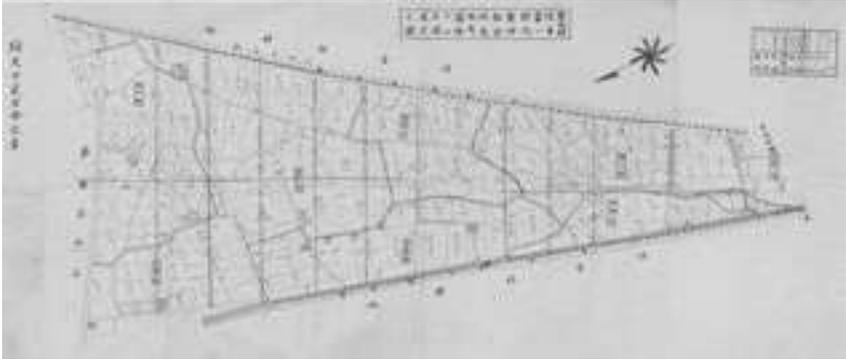
この芝川又右衛門邸の最寄駅は、阪急の甲東園駅です。阪急電鉄の、今の西宮北口から宝塚までの今津線、かつては西宝線とっておりましたが、その路線が開通した当時は、今の甲東園や仁川という駅はありませんでした。そこで、芝川又右衛門の方から阪急電鉄社長の小林一三に、いわゆる請願駅といえますか、お願いして駅をつくってもらったのです。芝川は約一万坪の土地と五千円の現金を寄付いたしました、阪急はその土地を分譲した利益でもって、駅を新設したわけです。それでできたのが、写真の甲東園駅です。当時は「甲東園前停車場」とおりました。「甲東園」というのは、又右衛門が経営していた果樹園の名称だったのですが、今はこのあたりの地名、駅名になっております。

さて、もともと関西学院は、王子動物園がある原田の森にあったんですけれど

も、昭和の初めにこの甲東園の上ヶ原の地に移転して参りました。上ヶ原の移転用地の確保は、阪急電鉄の小林一三が行ったのですが、この辺りに広大な土地を所有しておった又右衛門、そして芝川家が経営する千島土地は、一万坪近い所有地や、ため池の水利権などを関学に無償提供しました。更に、又右衛門は小林一三と覚書を交わして、自己所有地以外の土地の入手のとりまとめを行っております。売却を済る所有者の土地を、自分が所有する土地との交換によって入手するなど、又右衛門は関学の移転用地確保に多大な貢献をしたと聞いております。そもそも、関学がいくつかの候補地の中から甲東園を移転先に決めたのは、芝川が駅をつくり、また駅から自分の所有地まで道路を通していたことも大きかったとも言われております。関学の移転にあたっては、又右衛門の息子である又四郎が、関学のベーツ校長に、アメリカの大学のように、閉ざされていない開放的なキャンパスをつくってほしいという要望を出したとも言われておりまして、実際に、そのような塀のない、周囲に開かれた大学がつくられました。

次に、芝川又四郎のお話をいたします。彼の代になりました、いよいよ帝塚山学院との関係が出てまいります。又四郎は、帝塚山学院初代学長の庄野貞一とほぼ同年代ですね。帝塚山学院のお話の後、NHKの朝ドラ「マッサン」の竹鶴政孝とリタに関するお話もさせていただきます。

まず、帝塚山学院発行の百年史にも出ておりますけども、帝塚山の土地の開発について述べさせていただきます。明治十二年の地図を見ると、帝塚山周辺は、街道沿いに集落がある他はほとんど何も無いというような状況です。それから少し時代が下りまして、明治十九年には、少し住吉大社の周りが開けていますが、帝塚山界限には住宅が見られません。帝塚山というのは、ご存知のようにアップダウンのある土地で、あまり農地には適さないというようなところでありましたし、当時は道路もあまり整備されていなかったわけですね。それが明治



住吉第一耕地整理組合地区及び隣接図



東成土地建物株式会社経営地の図

三十三年に、今の南海電鉄高野線の前身であります、高野登山鉄道が帝塚山エリアに開通します。それから同じ年に大阪馬車鉄道、これは現在の阪堺電軌上町線でありますけれど、こちらも開通して、一気にこの地域の交通の利便性が高まったわけですね。そこで明治四十五年、当時の

住吉村の村長、太田儀兵衛が組合長になって、この地の耕地整理組合を設立し、翌年の大正二年から農地の整備に取り掛かりました。

そしてこちらは帝塚山学院の百年史にも掲載いただきましたけども、東成土地建物株式会社の経営地の図面です。当時このエリアで一番大きな土地所有者だった山田市郎兵衛を中心にして、芝川も加わりまして、東成土



仁川コロニー（帝塚山学院 所蔵）



仁川コロニー周辺地図

地建物株式会社を設立しました。さきほどの耕地整理が完了したところに、大正三年から、住宅地としてこのように区画整理をして、分譲を始めたということです。帝塚山学院の小学校の敷地というのは、このエリア全体の発展のために当初から計画しておったようで、東成土地建物株式会社が中心となって進めたようですね。大正五年に用地の提供に合意しまして、翌年の大正六年に、帝塚山学院の小学校が開校したわけです。この帝塚山学院の開校に際して、又四郎の父親の又右衛門は帝塚山学院に五百円を寄付しております。それから大正十五年には、又四郎が所有地の上に幼稚園舎を建てて、これを無償で提供いたしました。また、昭和十年には、講堂の暖房の施設を寄付しております。この辺は、帝塚山学院の百年史にも詳しく記載されております。

しかし、帝塚山学院と芝川の関係では、何といっても仁川コロニーが有名です。もともと仁川コロニーの敷地には、甲東園を開発いたしました又四郎の父であります又右衛門が、大正時代に、周辺の住宅経営者とともに小学校をつくるということを計画しておりました。それで千島土地が、敷地の千五百坪と校舎の建設費として約一万円を寄付したわけですね。ところが、学校経営というのはなかなか難しいようで、廃校になっ



甲東園での芝川又四郎と庄野貞一



帝塚山芝川邸前にて又四郎の子
供たち

てしまいました。それを、「自然に親しむ教育」を重視していた帝塚山学院校長の庄野貞一先生が、仁川コロニーという帝塚山学院の郊外学舎にされたということです。近い将来、小学校校舎を帝塚山学院が買い取るという条件で又四郎が購入し、帝塚山学院に無償提供したわけです。地図を見ると、芝川家の別荘と、「甲東園」といわれる芝川家の果樹園の近くに仁川コロニーがあることがわかります。仁川コロニーの生徒さんは、又右衛門が経営する果樹園や農園、関西学院のプール等も使うことができたというように聞いております。

それにしても、芝川又四郎は、随分と帝塚山学院に対していろんな支援をいたしました。これはどういうわけであったかということをお話ししたいと思います。

芝川又四郎は、大正の初期、三年から六年頃かと思われませんが、神戸から帝塚山の姫松に移ってまいりました。これは第一次世界大戦が勃発しまして、住まいのある神戸から芝川家の事業事務所がある大阪に連絡が取りにくくなったという事で、帝塚山に居宅を移したと聞いております。これが当時の帝塚山の芝川邸の数少ない写真のひとつです。又四郎の五人の子供たちが写っております。今までにいろんな資料をご覧いただいた



竣工間もない頃の芝川ビル

通り、当社には随分古い資料がたくさん残っておるんですけども、どういうわけか、この帝塚山の屋敷の全貌が写った写真が一枚もないのです。もし本日会場に来ておられる方々で、何かそういう資料をお持ちの方がいらっしやいましたら、ご一報いただければ幸いです。

又四郎の長女の百合子が、あまり体が丈夫でなかったということもあり、三人の娘たちは学校には通わず、家庭教師から教育を受けました。ですから、帝塚山に住まいながら、芝川家の子供たちは帝塚山学院には通っておりません。しかしながら、帝塚山の芝川の家の近所に庄野貞一が住んでおり、又四郎と庄野先生は親交を深めることとなります。大正十一年には青島と大連、翌年の大正十二年には上海と一緒に旅行もしております、その旅の中でも、土地開発でありますとか教育について語り合ったのではないのでしょうか。これは甲東園の果樹園で食事をしております庄野貞一と又四郎の写真です。一緒に写っている女の子は庄野先生のお嬢さんではないかと

思います。又四郎は大学時代に教育学の講義を受けて以来、教育に大きな関心を寄せておりました。そんな中で庄野貞一と出会い、教育について語り、理想を共有できたことが、帝塚山学院への支援につながったのではないかと推測しております。

次にお話する芝蘭社家政学園も、庄野貞一と非常に関係が深い学校です。現在も淀屋橋にあります芝川ビルにあった女子教育の学校、いわゆる花嫁学校ですね。これは竣工間もない芝川ビルの外観ですが、当時、この芝川ビルというのは、芝川家の資産等を管理するための事業用事務所として建てられたんですね。又四郎が関東大震災の惨状を見まして、地震と火災に強い建物を建てようということで、窓にも全部鉄扉をつけまして、外からの火の粉も



甲東園での芝蘭社家政学園関係者

防ぐような、非常に頑丈な造りの建物です。ところが、芝川家の事務所だけでは、広過ぎてスペースが余っているということから、又四郎と庄野先生が相談しまして、女学校を卒業した子女の嫁入り前の教育のための学校を設立しようということのできたのが、芝蘭社家政学園であります。庄野貞一は芝蘭社の学監に就任しました。

これは昭和四年に芝蘭社家政学園が開校して間もない頃、芝蘭社の先生方や生徒たちと一緒に甲東園の果樹園を訪れた際の写真です。次に甲東園の写真で、後列右から庄野貞一、私の祖母に当たります、芝蘭社で園長をしていました芝川まき、そして又四郎であります。余談ですが、女性の後ろに少し写っているベンチは、甲東園の芝川邸が博物館明治村に移築される際に一緒に保管いただいております。甲東園の芝川邸は建築家の武田五一の設計なんです。武田五一を研究しておられる神戸大学の先生がこのベンチの設計図面をご覧になってはじめて武田五一設計によるものと判明いたしました、それまではただのベンチだったんですけども、ここから一躍価値のあるベンチということになったわけです。

そして、次の写真は芝川ビルの屋上で撮ったものです。庄野貞一と又四郎とまきも写っていますね。これは恐らく、北に向かって撮影したものだと思いますが、当時の街並みをうかがい知ることができる写真です。生徒も



芝蘭社家政学園の生徒・教員たち



芝川ビル屋上にて



授業を見学する庄野貞一と芝川まき

多くがまだ和装の時代ですね。続きまして授業の風景です。西洋料理の授業を庄野貞一とまきが見学しています。ここで教えている先生は吉浦秀吉という方で、長崎のベルビューホテルでありますとか、外国船でコックをして修業されました。昭和六年から十八年までは、帝塚山学院高等女学校の家庭科でも教鞭を執っておられたということです。現在の芝川ビルは、飲食店や物販などの店舗が入居するテナントビルとなっておりますが、地下のベトナム料理の RIVE GAUCHE というお店が、ちょうど調理実習の授業をしておった部屋でして、この当時の流しが現存しております。ですから地下の RIVE GAUCHE では、今もこの流しをご覧いただくことができます。

当時は、和裁はどこの先生、それから生け花はどこというふうには、子女の花嫁教育というの、稽古先を転々と回ることが一般的だったんですけれども、芝蘭社家政学園は、一カ所で各科目を、しかも受けたい授業を自由に選択できる

ということで三千人を超えるお嬢さんが卒業されたということです。これは芝川ビル屋上での芝蘭社の卒業写真と思われる写真ですが、当時、周りはまだこんなに木造の民家ばかりだったんですね。庄野先生と又四郎とまきも写っておりますが、やはりほとんどの方は和服です。

ところが戦火が激しくなっておりまして、芝蘭社でも物資が不足し、授業の教材などもなかなか手に入らないということもありまして、昭和十八年に閉校いたしました。私どもの手元に卒業生の名簿が残っておりますけれども、女性の方々が結婚されますと姓が変わってしまいますんで、なかなか探すのは難しい。時々、母が通ってましたと訪ねてこられる方もいらっしゃいますけれども、皆さんもう九十歳を越えておられるんで、卒業生の方に当時のお話を伺うのも今となってはなかなか機会がありません。

ここから一昨年前の朝ドラ「マッサン」のお話に移ってまいります。又四郎が、先ほど申しました帝塚山に住むようになった頃に、竹鶴政孝は摂津酒造に勤務しておりました。その後、スコットランドに留学し、大正九年にリタというスコットランドの女性と結婚して帰国します。当時、竹鶴夫婦は、摂津酒造の阿部社長が用意した



給水装置申込書

帝塚山の家に住んでおりましたが、その後、又四郎の所有する建物に移ります。これは、又四郎の父の又右衛門が甲東園に持つておった建物、洋館を移築したものでした。洋館だったということですので、スコットランド人のリタも暮らしやすいかたのではないかと思えます。当社には、この家に水を引き込む際の申込書が残っております。これは住吉の役場に申し込んだものですが、日付が大正十二年になっております。この資料の日付が、竹鶴夫妻が又四郎の用意した建物に移って来た時であれ



甲東園での竹鶴夫妻

ば、ドラマにも出てきますけれども、竹鶴政孝は大正十一年に摂津酒造を退社した後、桃山学院での教師生活を経て、大正十二年に寿屋に入社しておりますので、その頃でしょうか。またこの頃、リタ夫人は、先ほどの写真の又四郎の三人の娘たちに英語を教えたと聞いております。

さて、ドラマの登場人物では、「野々村茂」が芝川又四郎をモデルにしていたと思われる人物なのですが、この「野々村」というネーミングがちよつとまづかった。当時、世間を騒がせた同姓の西宮市議の方がおられました。さらにドラマの中では、この野々村さんは女中だった女性を後妻さんにされておまして、先妻のお子さんである女の子二人に、リタが英語を教えるというストーリーでしたけれども、実際には、又四郎は再婚することはありませんでした。五人の子供の上の三人の女の子がリタから英語を習ったということだったので。

さて、こちらは甲東園を散策する竹鶴夫妻と思われる男女の写真です。又右衛門と、リタから英語を習った又四郎の長女の百合子と思われる女の子も写っています。次はリタと又四郎の三女・霜子、そして次女のお美子と、その夫との写真です。手前のお嬢さんは竹鶴夫妻の養女のリマですね。芝川家と竹鶴夫妻の私的な交流を物語る資料かと思えます。



リタと霜子



リタと芙美子夫婦

後のニッカウキスキー、ニッカですね、を設立する際に、又四郎とともに出資したということです。竹鶴政孝は寿屋にいた時に、山崎の蒸留所におりまして、その近所に、今はアサヒビールの大山崎山荘美術館になっております加賀正太郎の居宅がありました。リタが加賀夫人に英語を教えていたということもあって、その頃から親しくされていたようです。この大山崎山荘は、非常に数奇な運命を辿りました。加賀夫人が亡くなった後に加賀家の手を離れて後、マンションディベロPPERや不動産屋を転々といたしまして、最終的に、京都府や大山崎町の要請を受けてアサヒビールが購入し、美術館となりました。実は加賀正太郎は、亡くなる前にニッカの株をアサヒビールの山本為三郎に譲られました、その時、私どもも同様にしました。その加賀正太郎の邸宅を、後にアサヒビールが手に入れたということで、加賀正太郎とニッカとアサヒビール、不思議な巡り合わせですけども、

さて、ここからはニッカウキスキーのお話に移ります。先ほど須磨の別荘のお話をいたしました際に、芝川家のお隣が加賀家だったと申しましたけれども、加賀家の加賀正太郎と、芝川又四郎のすぐ下の弟の又之助が同い年でした。更に二人とも昆虫採集や登山が好きでして、趣味が合い、親しくしておったようです。又四郎はこの弟を通じて加賀正太郎と知り合ったようです。加賀正太郎は加賀証券を経営していましたけれども、竹鶴政孝が日本果汁株式会社、



「安分知足」の石碑前での又四郎

最終的に収まるところに収まったんではないかと考えております。

さて、大日本果汁株式会社の設立総会は昭和九年に開かれますが、その会場となったのは、芝蘭社家政学園のありました芝川ビルです。当時、ニッカの本店所在地は東京だったんですけども、大阪支社は芝川ビルに設置されました。ニッカはその後、北海道の余市の工場でウイスキーの製造に乗り出すわけですけども、何分にもウイスキーというのは、仕込んでから実際に商品になるまで時間がかかります。加賀正太郎というのは、本業が証券会社で、日々相場が変動する、一日一日が勝負の方です。一方、又四郎は不動産経営なので、非常に長いスパンで物事を考えます。ニッカがなかなか業績を上げられない際には、出資の引き上げを主張する加賀正太郎を、「あ

と一年頑張ろう」と又四郎が説得したという話も、又四郎の回顧録の中に出てまいります。こうして昭和十五年に待望の第一号のニッカウキスキーが世に出ました。

ところで、なぜ又四郎がニッカに関心を持ち、出資をしたのかということですけども、「大日本果汁」という社名が表すように、当初ニッカはリンゴジュースを製造販売しておったんですね。実は又四郎は、宮崎県の日向に農園を所有しておりまして、かんきつ類の栽培をしております。また甲東園では、父の又右衛門が果樹栽培をしておりますので、農作物を加工して活用するということに非常に興味を持っておったようです。ですから、当初はリンゴジュースをつくるという事業に惹かれ、出資に関心を持ったのではないかと考えております。

最後になりますけども、これは、博物館明治村に移築される以前の甲東園芝川邸の前での又四郎の写真です。「安分知足」と書かれた石碑がありますが、これは、自らの分を弁えて、欲を出さないというような意味です。又四郎はこういった言葉を心に刻んで、自らを律してきたのではないかと思えます。本日お話ししましたように、芝川家というのは、自らが前面に出るのではなく、縁の下の力持ちというか、何事にも自らの分をわきまえて、その範囲内のできる貢献をするということで百年以上続いてきた家です。今後もできる範囲で、社会貢献も含めて、皆さんのお役に立っていければというふうに考えております。

以上、初めての講演内容でお聞き苦しいところも多々あったかと思えますけれども、これで私の講演を終わらせていただきます。どうもありがとうございます。